様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 １９ 日現在

機関番号：１７６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ００４１９

研究課題名（和文）文学と医学の狭間に見えるアングロ・サクソン侵略の系譜ーアフロアメリカとアフリカ

研究課題名（英文）Traces of Anglo-saxon whites' invasions seen through African American and African literature and medicine

研究代表者
玉田　吉行（TAMADA, Yoshiyuki）

宮崎大学・多言語多文化教育研究センター・特別教授

研究者番号：８０２０７２３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：資本主義の対案として出来た共産主義国ロシアの傍若無人ぶりには、西洋のしてきた暴虐も霞んで見える。アングロ・サクソン中心の奪う側が如何に巧妙に支配を続け、奪われる側が理不尽を強いられて来たかの実態と基本構造の一端を、文学（文学作品）と医学（エイズなど）の狭間から明らかにしようとした。①ガーナと独立、②コンゴの独立・コンゴ危機とエボラ出血熱、③ケニアと新植民地支配とエイズ、④南アフリカとアパルトヘイトとエイズを軸に、アングロ・サクソン侵略の系譜の基本構造を辿った。極めて大きなテーマである。
奴隷体験記とアフリカのエイズの小説を軸に、別のアングロ・サクソン侵略の系譜を辿る申請が出来ればと願っている。

研究成果の学術的意義や社会的意義
侵略者側にいてアフリカを誰よりも知るデヴィドスンは「アフリカ問題の解決策は西洋諸国の経済的譲歩しかない」と言ったが、昨今のロシアの問題も根は同じ。だが、実際は絶望的である。申請時にも書いたが、研究もしないよりはという程度でしかない。この五百年のアングロ・サクソン系譜の実態と基本構造を明らかにしても、コロナやロシアで苦悩する中では、然程の意味があるとは思えない。東側を除く世界の基本的構図、文学と医学の狭間から見た世界が、少しは役に立てばと願う。奴隷貿易が資本主義社会を産み、その体制を護るために原子力が生まれ、人工的に作られたと思われるHIVやCOVID-19の脅威に、現に晒されているのだから。

研究成果の概要（英文）： The past Anglo-saxon brutality I traced back has recently been blurred by an absurd and arrogant Ucrainian intrusion by Russia, which was once created as a capitalist anti-thesis. I have tried to show how the robber (the rich) of Anglo-Saxon whites have ruled over the robber (the poor) through the gap between literature (literary works) and medicine (AIDS epidemic and so on). This is undoubtedly a big issue, indeed. I’ve traced back some of the realties and basic structures of Anglo-saxon intrusive history, centered on ①Ghana, Independence & Independence, ②Congo, Independence & Congo Crisis, ③Kenyan neo-colonialism & AIDS epidemic, and ④South Africa, Apartheid & AIDS epidemic.
I hope I can one day apply Kanenhi under the continued part of the same theme :Traces of Anglo-saxon whites' invasions seen through African American and African literature and medicine, with the best use of slave-narratives and AIDS stories that I have still have.

研究分野：アフリカ文学、アフリカ系アメリカ人文学

キーワード：リチャード・ライト　アレックス・ラ・グーマ　アフリカ文学　アフリカ系アメリカ文学　エイズの小説　南アフリカ　コンゴ　ケニア

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

ライトの作品を理解したいという思いからアフリカ系アメリカ人の歴史を辿り始めてから４０年近くになります。その中でその人たちがアフリカから連れて来られたのだと合点して自然にアフリカに目が向きました。大学に職を得る前に黒人研究の会でアフリカ系アメリカとアフリカを繋ぐテーマでのシンポジウムをして最初の著書『箱舟、21 世紀に向けて』（著書 7, 1987）にガーナへの訪問記 Black Power を軸に「リチャード・ライトとアフリカ」をまとめて以来、南アフリカ→コンゴ・エボラ出血熱→ケニア、ジンバブエ→エイズと広がって行きました。辿った結論から言えば、アフリカの問題に対する根本的な改善策があるとは到底思えません。英国人歴史家バズゥル・デヴィドスンが指摘するように、根本的改善策には大幅な先進国の経済的譲歩が必要ですが、残念ながら、現実には譲歩の兆しも見えないからです。しかし、学問に役割があるなら、大幅な先進国の譲歩を引き出せなくても、小幅でも先進国に意識改革を促すように提言をし続けることが大切だと考えるようになりました。たとえ僅かな希望でも、ないよりはいいのでしょうから。

文学しか念頭になかったせいでしょう。「文学のための文学」を当然と思い込んでいましたが、アフリカ系アメリカの歴史とアフリカの歴史を辿るうちに、その考えは見事に消えてなくなりました。ここ５００年余りの欧米の侵略は凄まじく、白人優位、黒人蔑視の意識を浸透させました。欧米勢力の中でも一番厚かましかった人たち（アフリカ分割で一番多くの取り分を我がものにした人たち）が使っていた言葉が英語で、その言葉は今や国際語だそうです。英語を強制された国（所謂コモンウェルスカントリィズ）は五十数カ国にのぼります。1992 年に滞在したハラレのジンバブエ大学では、90%を占めるアフリカ人が大学内では母国語のショナ語やンデベレ語を使わずに英語を使っていました。ペンタゴンで開発された武器を個人向けに普及させたパソコンのおかげで、今や 90%以上の情報が英語で発信されているとも言われ、まさに文化侵略の最終段階の様相を呈しています。

聖書と銃で侵略を始めたわけですが、大西洋を挟んで 350 年にわたって行われた奴隷貿易で資本蓄積を果たした西洋社会は産業革命を起こし、生産手段を従来の手から機械に変えました。その結果、人類が使い切れないほどの製品を生産し、大量消費社会への歩みを始めました。当時必要だったのは、製品を売り捌くための市場と更なる生産のための安価な労働者と原材料で、アフリカが標的となりました。アフリカ争奪戦は熾烈で、世界大戦の危機を懸念してベルリンで会議を開いて植民地の取り分を決めたものの、結局は二度の世界大戦で壮絶に殺し合いました。戦後の２０年ほど、それまで虐げられていた人たちの解放闘争、独立闘争が続きますが、結局は復興を遂げた西洋諸国と米国と日本が新しい形態の支配体制を築きました。開発や援助を名目に、国連や世界銀行などで組織固めをした多国籍企業による経済支配体制です。アフリカ系アメリカとアフリカの歴史を辿っていましたら、そんな構図が見えてきて、辿った歴史を二冊の英文書 Africa and Its Descendants 1（著書 3, 1995）と Africa and Its Descendants 2 - The Neo-Colonial Stage（著書 2, 1998）にまとめました。奴隷貿易、奴隷制、植民地支配、人種隔離政策、独立闘争、アパルトヘイト、多国籍企業による経済支配などの過程で、虐げられた側の人たちは強要されて使うようになった英語で数々の歴史に残る文学作品を残してきました。時代に抗いながら精一杯生きた人たちの魂の記録です。

２．研究の目的

作品を理解したいという思いから辿った歴史ですが、今度は歴史に刻まれた文学作品から歴史を辿りながら侵略の基本構造と侵略のなかで苦しめられてきた人々の姿を明らかにするのが今回の目的です。

３．研究の方法

奪う側、持てる側（The Robber, Haves）は富を享受できて快適ですが、奪われる側、持たざる側（The Robbed, Haves-Not）はたまったものではありません。悔しい思いをした人たちが文学や自伝や評論に昇華して後の世に残しています。特にアングロ・サクソンに搾り取られできたアフロ・アメリカ、ガーナ、コンゴ、ケニア、南アフリカの系譜を辿り、文学と医学の狭間から見たいと思います。

それぞれの手がかりとする作品と明らかにするテーマは以下の通りです。

★＜アフロ・アメリカと人種隔離政策＞

歴史とライトの自伝的スケッチ"The Ethics of Living Jim Crow"、歴史的スケッチ 12 Million Black Voices、小説 Native Son、自伝 Black Boy 、ミシェル・ファーブルさんのライトの伝記 The Unfinished Quest of Richard Wright、マルコムの Malcolm X on Afro-American History

★＜ガーナと独立＞

ライトのガーナ訪問記 Black Power とクワメ・エンクルマの自伝 The Autobiography of Kwame Nkrumah と自伝 Africa Must Unite

★＜コンゴの独立・コンゴ危機とエボラ出血熱＞

トーマス・カンザの評論 The Rise and Fall of Patrice Lumumba とリチャード・プレストンの小説 Hot Zone、バズゥル・デヴィドスンの African Series
★＜ケニアと新植民地支配とエイズ＞
グギの評論 Writers in Politics 、ワグムンダ・ゲテリアのエイズの小説 Nice People、メジャー・ムアンギのエイズの小説 The Last Plague
★＜南アフリカとアパルトヘイトとエイズ＞
ラ・グーマの And a Threefold Cord、セスゥル・エイブラハムズのラ・グーマの伝記・作品論 Alex La Guma、ベンジャミン・ポグルンドのロバート・マンガリソ・ソブクエの伝記 Sobukuwe and Apartheid 、レイモンド・ダウニングの評論 As They See It – The Development of the African AIDS Discourse、メイ・ポン編 The Struggle for South Africa
アングロ・サクソン中心の奪う側、持てる側（The Robber, Haves）が如何に強引に、そして巧妙に支配を続けていて、アフロ・アメリカ、ガーナ、コンゴ、ケニア、南アフリカの奪われる側、持たざる側（The Robbed, Haves-Not）が如何に辱められ、理不尽を強いられてきたか、文学作品とエイズやエボラ出血熱―文学と医学の狭間から見えるその基本構造と実態を明らかにしたいと思います。

４．研究成果
資本主義の対案として出来た共産主義国ロシアの傍若無人ぶりには、西洋のしてきた暴虐も霞んで見える。アングロ・サクソン中心の奪う側が如何に巧妙に支配を続け、奪われる側が理不尽を強いられて来たかの実態と基本構造の一端を、文学（文学作品）と医学（エイズなど）の狭間から明らかにしようとした。①ガーナと独立、②コンゴの独立・コンゴ危機とエボラ出血熱、③ケニアと新植民地支配とエイズ、④南アフリカとアパルトヘイトとエイズを軸に、アングロ・サクソン侵略の系譜の基本構造を辿った。極めて大きなテーマである。
奴隷体験記とアフリカのエイズの小説を軸に、別のアングロ・サクソン侵略の系譜を辿る申請が出来ればと願っている。
侵略者側にいてアフリカを誰よりも知るデヴィドスンは「アフリカ問題の解決策は西洋諸国の経済的譲歩しかない」と言ったが、昨今のロシアの問題も根は同じ。だが、実際は絶望的である。申請時にも書いたが、研究もしないよりはという程度でしかない。この五百年のアングロ・サクソン系譜の実態と基本構造を明らかにしても、コロナやロシアで苦悩する中では、然程の意味があるとは思えない。東側を除く世界の基本的構図、文学と医学の狭間から見た世界が、少しは役に立てばと願う。奴隷貿易が資本主義社会を産み、その体制を護るために原子力が生まれ、人工的に作られたと思われる HIV や COVID-19 の脅威に、現に晒されているのだから。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 玉田吉行	４．巻 1号
２．論文標題 アングロ・サクソン侵略の系譜１：概要	５．発行年 2018年
３．雑誌名 続モンド通信	６．最初と最後の頁 5-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 玉田吉行	４．巻 2号
２．論文標題 アングロ・サクソン侵略の系譜２：着想と展開	５．発行年 2019年
３．雑誌名 続モンド通信	６．最初と最後の頁 4-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 玉田吉行	４．巻 3号
２．論文標題 アングロ・サクソン侵略の系譜３：「クロスセクション」	５．発行年 2019年
３．雑誌名 続モンド通信	６．最初と最後の頁 3-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 玉田吉行	４．巻 ４号
２．論文標題 アングロ・サクソン侵略の系譜４：リチャード・ライト死後２５周年シンポジウム	５．発行年 2019年
３．雑誌名 続モンド通信	６．最初と最後の頁 4-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計1件

１．著者名 Michael Schauerte、玉田吉行、横山彰三、杉村佳彦、寺尾智史	４．発行年 2019年
２．出版社 宮崎大学語学教育センター	５．総ページ数 ６９
３．書名 アングロ・サクソン侵略の系譜	

〔産業財産権〕

〔その他〕

「『まして束ねし縄なれば』の文学技法―雨の象徴性と擬声語の効用を軸に―」
https://kojimakei.jp/tama/topics/works/w2010/3745
リチャード・ライトの世界
https://kojimakei.jp/tama/topics/works/w2010/2846

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関